

博士論文（要約）

論文題目

近松門左衛門の浄瑠璃作品における秩序と情念

—— 敵役のゆくえ ——

氏名 菅原 令子

目次

序論 先行研究と本論の立場

第一節 本論の目的と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第二節 先行研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第一章 『出世景清』における秩序と情念

第一節 景清の基本的な人物像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第二節 幸若舞『景清』と古浄瑠璃『かげきよ』・・・・・・・・・・・・・ 21

第三節 『出世景清』における秩序と情念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

第四節 『出世景清』における女と敵役・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

第二章 『堀川波鼓』における敵役と女

第一節 曾我物から辿る敵役の描写・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

第二節 『堀川波鼓』における秩序と情念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

第三節 『堀川波鼓』における敵役と女・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

第三章 『曾根崎心中』における敵役と立役

第一節 『曾根崎心中』における秩序と情念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

第二節 『曾根崎心中』における敵役と立役・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102

第四章 『女殺油地獄』にみる敵役のゆくえ

第一節 『女殺油地獄』にみる敵役のゆくえ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111

第二節 近松門左衛門浄瑠璃作品における敵役のゆくえ・・・・・・・・・・ 123

注・・ 127

参考文献表・・ 138

本文 五年以内に出版予定

参考文献

原典資料

- 近松全集刊行会編纂『近松全集』第一巻〜第十七巻 補遺 岩波書店 一九八五〜一九九六年
 重友毅校注『近松浄瑠璃集 上』日本古典文学大系49 岩波書店 一九五八年
 守随憲治・大久保忠國校注『近松浄瑠璃集 下』日本古典文学大系50、岩波書店 一九五九年
 森修・鳥越文蔵・長友千代治校注・訳『近松門左衛門集 一』日本古典文学全集43 小学館 一九七二年
 鳥越文蔵校注・訳『近松門左衛門集 二』日本古典文学全集44 小学館 一九七五年
 鳥越文蔵・山根為雄、長友千代治、大橋正叔、坂口弘之校注・訳『近松門左衛門集』①②③ 新編日本古典文学全集74〜76 小学館 一九九七
 年
 国書刊行会編『新群書類従』第6・9巻 国書刊行会 一九〇六〜一九〇八年
 市古貞次校注・訳『平家物語 ①②』新編日本古典文学全集45、46 小学館 一九九四年
 黒川眞道・堀田璋左右・古内三千代校訂『平家物語 長門本』国書刊行会 一九〇六年
 國學院大学蔵版『屋代本 平家物語』角川書店 一九六六年
 吉沢義則校註『平家物語…応永書写延慶本』白帝社 一九六一年
 田中充編『未刊謡曲集 第3』古典文庫第212・3 古典文庫 一九六五年
 野上豊一郎編『新装愛蔵版 解説 謡曲全集』巻4・5 中央公論社 一九八四年
 麻原美子・北原保雄校注『舞の本』新日本古典文学大系59 岩波書店 一九九四年
 荒木繁・池田廣司・山本吉左右編注『幸若舞2』東洋文庫417 平凡社 一九八三年
 信多純一・坂口弘之『古浄瑠璃 説教集』新日本古典文学大系90 岩波書店 一九九九年
 横山重校訂『古浄瑠璃正本集』第1〜第10 角川書店 一九三九〜一九八二年
 梶原正昭・大津雄一訳注『曾我物語』新編日本古典文学全集53 小学館 二〇〇二年
 市古貞次・大島建彦校注『曾我物語』日本古典文学大系88 岩波書店 一九六六年
 谷脇理史・富士昭雄・井上敏幸校注『武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴名残の友』新日本古典文学大系77 岩波書店 一九八九年

研究書

- 井口洋『近松世話浄瑠璃論』和泉書院 一九八六年
- 内山美樹子『浄瑠璃史の十八世紀』勉誠出版 一九九九年（初版一九八九年）
- 大原健士郎『心中考』太陽出版 一九八七年
- 荻田敏夫『近松世話物の世界』真珠書院 二〇〇九年
- 菅野覚明『本居宣長』ぺりかん社 一九九一年
- 菅野覚明『よみがえる武士道』PHP研究所 二〇〇二年
- 菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書 二〇〇四年
- 木村泰賢『木村泰賢全集 第3巻 原始仏教思想論』大法輪閣 一九六八年
- 神戸女子大学古典芸能研究センター編『近松再発見…華やぎと哀しみ』和泉書院 二〇一〇年
- 信多純一『近松の世界』平凡社 一九九一年
- 白方勝『近松浄瑠璃の研究』風間書房 一九九三年
- 相良亨『武士道』講談社学術文庫 二〇一〇年（初出一九六八年）
- 相良亨『相良亨著作集』一〜六 ペリかん社 一九九二〜一九九五年
- 相良亨編『超越の思想』東京大学出版会 一九九三年
- 諏訪春雄『近世戯曲史序説』白水社 一九八六年
- 末木文美士『近世の仏教 華ひらく思想と文化』歴史文化ライブラリー300 吉川弘文館 二〇一〇年
- 田村芳郎・源了圓編『日本における生と死の思想』有斐閣選書 一九七七年
- 田村芳朗『田村芳朗仏教学論集 第一巻 本覚思想論』春秋社 一九九〇年
- 竹内整一・西村道一・窪田高明編『日本思想史叙説 第二集』ぺりかん社 一九八四年
- 高島元洋『日本人の感情』ぺりかん社 二〇〇〇年
- 高野正巳『近松 文学と藝術』赤坂書院 一九八三年
- 近石泰秋『操浄瑠璃の研究―その戯曲的構成について』風間書房 一九六一年

- 近石泰秋『操浄瑠璃の研究 続編』風間書房 一九六五年
- 近松研究会編『近松門左衛門―研究入門』東京大学出版会 一九五六年
- 千葉徳爾『日本人はなぜ切腹するのか』東京堂出版 一九九四年
- 坪内逍遙・網島梁川共編『近松之研究』春陽堂 一九〇〇年
- 鳥居フミ子『近松の女性たち』武蔵野書院 一九九九年
- 西村玲『近世仏教思想の独創―僧侶普寂の思想と実践』トランスビュー 二〇〇八年
- 速水侑『観音信仰』塙書房、一九七〇年
- 平田澄子『近松浄瑠璃の成立と展開』新典社研究叢書208 新典社 二〇一〇年
- 日野龍夫『江戸の儒教』日野龍夫著作集第1巻 ペリかん社 二〇〇五年
- 日野龍夫『宣長・秋成・蕪村』日野龍夫著作集第2巻 ペリかん社 二〇〇五年
- 日野龍夫『近世文学史』日野龍夫著作集第3巻 ペリかん社 二〇〇五年
- 廣末保『増補近松序説』未来社 一九五七年
- 廣末保『廣末保著作集』第一〜三・五・九・十一巻 影書房 一九九六〜二〇〇一年
- 祐田善雄『浄瑠璃史論考』中央公論社 一九七五年
- 藤井乙男『藤井乙男著作集』第8巻 クレス出版 二〇〇七年
- 松崎仁『歌舞伎 浄瑠璃 ことば』八木書店 一九九四年
- 水谷不倒校訂註釈『近松傑作全集…新釈挿画 第一巻』早稲田大学出版部 一九一〇年
- 源了圓『義理と人情』中公新書 一九六九年
- 室木弥太郎『増訂 語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』風間書房 一九八一年(初版一九七〇年)
- 向井芳樹『近松の方法』桜楓社 一九七六年
- 森山重雄『近世の語りと劇…その御霊的な世界』三二書房 一九八七年
- 森修『近松と浄瑠璃』塙書房 一九九〇年
- 柳田國男『明治大正史・世相編』『定本柳田國男集 第二十四巻』筑摩書房 一九七〇年(初出一九三二年)

- 頼住光子『さとりと日本人 食・武・和・徳・行』ぶねうま舎 二〇一七年
- 和辻哲郎『続日本精神史研究』(『和辻哲郎全集』第四卷) 岩波書店 一九六二年(初出一九三五年)
- 和辻哲郎『日本倫理思想史』一〜四 岩波文庫 二〇一一〜二〇一二年(初出一九五二年)
- 和辻哲郎『歌舞伎と操り浄瑠璃』(『和辻哲郎全集』第十六卷) 岩波書店 一九六三年(初出一九五五年)

研究論文

- 荒木繁「近松の作品研究・「出世景清」」『文学』20巻10号 岩波書店 一九五二年
- 井黒香佳穂子「日向国と盲僧―景清伝説を中心として」『伝承』1号 伝承研究会 二〇〇五年
- 今尾哲也「なぜ『出世景清』か―初期五段構成浄瑠璃の読み解きについて」『国文学』第47巻第6号 二〇〇二年
- 今尾哲也「続・術語としての「時代」―当流浄瑠璃のドラマツルギー」『江戸文学』30号 ペリかん社 二〇〇四年
- 今尾哲也「仮説・「世界」の崩壊について」『歌舞伎―研究と批評』32号 歌舞伎学会 二〇〇四年
- 今尾哲也「〈通説〉を検証する」『歌舞伎―研究と批評』37号 歌舞伎学会 二〇〇六年
- 植田啓子「日向島」の景清像『季刊文学・語学』46号 全国大学国語国文学会 一九六七年
- 折口信夫「仇討ちのふおくろあ」『折口信夫全集 第十五巻』中央公論社 一九六七年
- 河合聡子「近松作品における敵役の一様相」『国語国文』第72巻第2号 京都大学文学部国語国文学研究室 二〇〇三年
- 菅野寛明「近世中期の学問―徂徠・真淵・宣長」『岩波講座日本文学史 第9巻(18世紀の文学)』久保田淳編 岩波書店 一九九六年
- 菅野寛明『鬼神論』の前提『倫理学紀要』第12輯 東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室 二〇〇四年
- 栗原剛『曾根崎心中』における生命『季刊日本思想史』62巻 ペリかん社 二〇〇二年
- 栗原剛「近松門左衛門における「心中」の倫理的意義―「心中重井筒」を手がかりに」『思想史研究』11号 日本思想史・思想論研究会 二〇一〇年
- 栗原剛『心中天の網島』における罪業と救済『山口大学哲学研究』24巻 山口大学哲学研究会 二〇一七年
- 小林健二『平家物語』から芸能へ―悪七兵衛景清像の展開『観世』79巻7号 二〇一二年
- 阪口弘之「寛永期古浄瑠璃の詞藻」『芸能史研究』167号 芸能史研究会 二〇〇四年

- 阪口弘之「古浄瑠璃から近松へ―演劇空間の創造」『國文學―解釈と教材の研究』53巻15号(通号 775号) 學燈社 二〇〇八年
- 阪口弘之「清盛物語」の構想」『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』7巻7号 神戸女子大学古典芸能研究センター 二〇一三年
- 白瀬浩司「出世景清」小攷―小野姫・阿古屋に着目して」『文学研究』69号 日本文学研究会一九八九年
- 染谷智幸「情報戦としての心中―『曾根崎心中』の評判・沙汰・噂」『日本文学』 日本文学協会 二〇〇八年
- 高島元洋『女殺油地獄』について―与兵衛とお吉の業』『実存主義』85巻 以文社 一九七八年
- 田代慶一郎「謡曲「景清」について」『比較文學研究』27号 東大比較文學會 一九七五年
- 千葉篤『出世景清』の世界―古浄瑠璃『かげきよ』と比較して―」『文学研究』46号 日本文学研究会 一九七七年
- 角田一郎「古浄瑠璃『かげきよ』と『出世景清』の関係」『文学』第21巻第7号 岩波書店 一九五三年
- 徳江元正「乞丐景清―幸若舞曲と題目立」『文学』46巻4号 岩波書店 一九七八年
- 徳竹由明「景清の娘『人丸』伝承考」『伝承文学研究』48号 伝承文学研究会 一九九八年
- 早川久美子「曾根崎心中」成立の意義―世話狂言との比較をめぐって」『日本文学』第56巻12号 日本文学協会 二〇〇七年
- 原道生「虚構としての『義理』」講座 日本思想 第3巻 相良亨、尾藤正英、秋山虔編 東京大学出版会 一九八三年
- 原道生「近松の『義理』」『近世演劇―歌舞伎と人形浄瑠璃』国文学研究資料館講演集11 国文学研究資料館整理閲覧部参考室 一九九〇年
- 原道生「近松門左衛門の浄瑠璃に見る「生と死」」『国文学』解題と鑑賞』73巻3号 至文堂 二〇〇八年
- 廣末保『作者』近松門左衛門」『国文学』解題と鑑賞』39巻11号 至文堂 一九七四年
- 深沢昌夫「足もとから見る『出世景清』―入牢後の景清を舞曲『景清』と対比して」『文芸研究』143号 日本文学研究会 一九九七年
- 森山重雄「原像の世界と近松悲劇 ―『出世景清』溯源」『国文学』解題と鑑賞』39巻11号一九七四年
- 森山重雄「女殺油地獄」『日本文学』30巻7号 日本文学協会 一九八一年
- 森山重雄「日本文学における^天皇制v」『日本文学』37巻6号 日本文学協会 一九八八年
- 柳田國男「一目小僧」『定本柳田國男集 第五巻』筑摩書房 一九六八年(初出一九一七年)
- 柳田國男「目一つ五郎考」『定本柳田國男集 第五巻』筑摩書房 一九六八年(初出一九二七年)
- 柳田國男「立烏帽子考」『定本柳田國男集 第十二巻』筑摩書房 一九六九年(初出一九二八年)
- 柳田國男「聾入考」『定本柳田國男集 第十五巻』筑摩書房 一九六九年(初出一九二九年)

柳田國男「仲人及び世間」『定本柳田國男集 第十五卷』筑摩書房 一九六九年（初出一九四一年）
頼住光子「悪」の宗教的意義に関する一考察―親鸞と道元をめぐる比較思想的探求』『お茶の水女子大学人文科学研究』お茶の水女子大学 二〇〇九年

論文の内容の要旨

論文題目 近松門左衛門の浄瑠璃作品における秩序と情念 —— 敵役のゆくえ ——

氏名 菅原令子

近松門左衛門の浄瑠璃作品は、その研究の最初期において、シェイクスピア悲劇と比較され、人間性を表現した作品として評価されてきた。それらの研究では、近代につながる資本主義や民主主義の萌芽を見出し評価しようとするため、近世における仏教の影響、近世封建社会における規範、朱子学の発想など、多くの要素が見落とされ、あるいは低く評価されている。悲劇として評価しようとする研究以外に、「情け」や武士の規範との関係に注目する研究もあるが、いわゆる世話物を対象としたものが主であり、近松が作り上げた思想構造全体を解き明かすに至っていない。近松の浄瑠璃作品の思想構造に注目する研究は、かえって供儀など古代や中世の構造を利用するものが多く、近世封建社会の特質を取り上げない傾向がある。これらの先行研究を踏まえ、本論では、近世の思想構造をもとに、近松が作り上げた思想構造全体を解き明かそうと試みた。

序章では、近松が情けという人間的な情感を描こうとしたこと、また古浄瑠璃と異なる、太平の世を祝賀する新たな結語を創作したことに注目し、近松が、私的な情念から秩序の成立を導くという朱子学の発想を背景に作劇を行ったことを明らかにした。また、近松作品がいわゆる勧善懲悪の筋を作り上げたこと、のちに悪や畜生と呼ばれる人物を主役とする作品を作ったことを踏まえ、その思想構造の変化を解き明かす必要があることを確認した。本論ではそのため、最初期の時代物から、敵役の特徴が確認できる一連の時代物と世話物、代表的な世話物、敵役的な人物を主役とする世話物を検討の対象としている。

倫理思想としては、近松の思想構造を明らかにし、近松が人間の实在をどのようにとらえたかを論じることで、近松が人間における悪をどのように捉えていたかを問うことができる。情念から秩序を導こうとする朱子学の発想から、敵役的な人物を主役とする作品が生まれるのであれば、近松作品の検討から人倫秩序におさまらない人間の本体が見出せよう。

一章では『出世景清』を対象とし、私的な情念と秩序との関係を解き明かした。『出世景清』の検討から、誠実な情念を持つ景清が、その誠実さゆえに秩序から突出すること、景清の平家への忠義が頼朝に認められることで、誠実な情念のままに世の秩序に加わり、太平の世の秩序を作りあげる一助となることが確認された。近松の思想構造には、秩序から突出するほどの誠実な情念が認められることで、秩序が更新されるという動的な要素がある。誠実な情念を持つ存在は、たとえ秩序からはみ出しても、秩序の中央にいる存在に認められることで、秩序に加わることができ、救われる。秩序を作り上げた存在も、そもそもそのような誠実な情念を持つ存在であり、秩序から突出する情念の持ち主であった。秩序から突出する誠実さこそ、秩序を作り上げ、強化するものなのである。一方で、このよ

うな秩序と人倫世界のうちにあつて、誠実な人間関係を築かない存在もいる。誠実な情念を持たず、私欲に基づいて行動する敵役である。敵役が立役に規範的に対立する存在であるとすれば、秩序に反する悪と言える存在は、秩序から突出する立役景清ではなく、秩序のうちにあるながら、誠実な人間関係を築かない敵役十蔵ということになる。

二章では敵役の特徴を確認した。まず曾我物の検討を行い、敵役が計量可能で代替可能な財貨や力によって関係を築こうとすること、死を恐れることが確認された。ついで『堀川波鼓』の検討から、敵役が女の命を懸けた誠実さに応えたくない、恋愛関係に通う真情が理解できない存在であることが明らかになった。しかし同時に、敵役が誠実な関係を恐れ避けるということは、誠実な関係の根底に、命を懸けた切実な情念があることを、ある意味で承知しているということも予感された。

三章では『曾根崎心中』を扱い、近世町人世界における秩序と情念の関係を確認した。お初と徳兵衛とが人倫秩序における理想を目指した時、二人が人倫世界から突出し、死によって二人の間だけで理想の関係に至ったことが明らかとなった。そのあり様が周囲の人々の心を動かし、人々に人倫秩序の理想を意識させることで、秩序の更新に結び付いた。一方で、人倫秩序の理想がいつのまにか人倫世界から突出してしまうということから、人倫世界を形作る人々のうちに、秩序とは相容れない部分があるということも明らかとなった。

ついで行った『曾根崎心中』の敵役九平次の検討から、秩序と相容れない部分とは、理想的関係に対する尻込みであり、理想的関係に感じる正体の分からない怖さであると確認できた。理想的関係には生の意味があると同時に死の気配があり、尻込みや恐怖は人間の生きたいという思いに起因する。秩序によって人間は生きているからこそ、それによって死ぬこともある。よりよく生きたいがゆえに人倫秩序の理想を求める時、死を受け入れがたい人間は、理想を前にして立ち止まる。そこで立ち止まらないのが立役であり、そこで尻込みすることが敵役の端緒である。人倫秩序の理想を前に、二つのあり方に分かれるのが、立役と敵役である。

四章では『女殺油地獄』の検討によって、敵役の後退りについて確認した。これによって、敵役の尻込みは制御できるものではないことが明らかになった。それは自己として現に存在し、生き死ぬことの受け止め難さに関わるものであり、人間が自己の存在理由を知らないまま生まれる以上は、すべての人間が敵役のように、自己の存在理由に対して後退りをする可能性があるということである。

結論は以下の通りである。近松門左衛門の浄瑠璃作品において、人倫世界の秩序は、関係に通う誠実な情念によって求められた。他者と誠実に関係しようとする時、人は秩序に則って関係しようとする。しかし、時に他者と誠実に関係しようとするあまり、人は人倫世界から突出し、また人倫秩序から逸脱してしまうことがある。その時、人はその誠実な情念を証明することで、人倫秩序の統制者や周囲の人々に認められ、人倫世界に回帰することができる。突出、または逸脱した者が回帰した人倫世界は、その者の誠実な情念を含

み込むことで人倫秩序を新たなものとして強化する。一方、人倫世界のうちには敵役のような不誠実な者も存在する。彼らは一見誠実な者と規範を異にするようだが、不誠実であることは、実は誠実な者との関わりを前提としている。関係を裏切るには、まず関係の中で生きることが必要である。人は普通人倫世界の中に生まれ、その人倫秩序を規範として志向する。人々が人倫秩序に則り、互いに誠実に関係しようとするとき、その関係に徹しきれない者、関係の前で立ち止まる者が不誠実な者である。対して関係に徹していく者が誠実な者である。命を懸けた誠実な関係は、相手のかけがえのなさに向き合うと共に、己のかけがえのなさを突き付けられるものである。その関係は、生きがいとなり、死ぬ理由となる。不誠実な者は、誠実な関係に含まれる死を恐れ立ち止まる。あるいはそこに露わとなった己の正体を拒否して後ずさる。財貨を通した交換可能で計量可能な関係は、誠実な関係を拒否した不誠実な者にとって好ましい関係である。不誠実な者の、誠実な関係を前にした後退は、制御できるものではない。それは自己として現に存在し、生き死ぬことの受け止め難さに関わる。敵役つまり人倫の世界におさまらない人間の正体とは、人間が自己の存在の根底を了解できないということである。